

郡場 秋蝶（こおりば・しゅうちょう）

1、プロフィール

都々逸（どどいつ）・川柳の作者。東奥日報社社会部の記者。大正年間、「東奥日報」紙の柳壇選者として指導的役割を果たし、本県都々逸の振興に努めた。

<生没>

1887(明治 20)年4月 21 日 ~ 1943(昭和 18)年 12 月 13 日

<代表作>

「昨年の都々逸界—驚くべき進歩発達、一躍中央文壇独占」(「東奥日報」大正 4 年 1 月 1 日付記事)

<青森との関わり>

青森市栄町に生まれる。明治 44 年頃都々逸界に現れ、大正 15 年青森県を離れるまで、第一人者を占める。

2、作家解説

都々逸の作り手・選者。(* 都々逸——七七七五調による短詩型の俗謡。江戸末期の天保年間に始まり、明治になって隆盛となる。) 明治 20 年青森市栄町に生まれる。本名は徹(とおる)。兄に、後の弘前大学学長、寛がいる。東京の私立錦城中学校卒業後、仙台の第二高等学校へ進む。その後、高校を中途退学して帰郷。明治 44 年 4 月、東奥日報社に入社、社会部記者に配属される。その一方、因防庵秋蝶の雅号で都々逸・川柳を作した。

都々逸を始めた時期・契機は未詳であるが、入社以前の明治 44 年 1 月 1 日、14 日の東奥日報紙に「秋蝶」選、募集都々逸が行われている。同年 4 月には同紙上で川柳の選も行っているが、以後、大正 15 年健康面の理由で青森県を離れるまで、本県都々逸のほとんど唯一の指導者として、向上と振興に努めた。

大正 2 年 3 年 4 年元旦の募集都々逸選などを初め、大正年間を通じて県下都々逸大会や文芸大会での選者を務める。大正 7 年頃、横田はまと結婚、3 人の

子供を設けた。また、秋蝶は気象測候の興味・知識も豊富で、本県の気候が自身の健康に合わないとの判断から、大正 15 年東奥日報社を退社、南洋庁（在パラオ、当時）に勤務。3年後帰国して、京都市役所に勤務。市史執筆に従事した。

昭和 18 年、京都の自宅で病気のため、57 歳で亡くなった。遺骨は、青森市三内霊園に眠る。

裂いちゃ捨てれぬ思出ばかり添へぬ昔の日記帳（大9・6・22）